朱鷺の墓

—愛怨の章—

五木寛之

朱鷺の墓

――愛怨の章――

新潮社

五木寛之

© 1972 Hiroyuki Itsuki, Printed in Japan

朱鷺の墓——愛怨の章——
昭和四十七年十二月一日印刷
昭和四十七年十二月五日発行
著者・五木寛之
発行者・佐藤亮一
発行所・株式会社新潮社
郵便番号・一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話・東京(03)二六〇-一一一一
振替・東京八〇八
塚田印刷株式会社
大口製本
定価四七〇円
落丁乱丁本はお取替えします

朱鷺（とき）の墓

――愛怨の章――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

水面にはかすかな霧が漂っていた。鉛色の豊かな水量が音もなく流れて行く。その水の流れは大きく、そして力強い大地の脈動のように思われる。水面の中央が、ややふくらんだように見えるのは、河の広さのせいだろう。

はるか対岸に、白い建物の影がかすんでいた。右手に美しい橋が霧の中に見え隠れしながらのびている。

あたりの風景は、ぼんやりと眠ったように静かだった。すでに午前零時を過ぎた深夜だというのに、周囲は明るく、背後の公園の樹木も、寺院の丸屋根も、淡い灰色の光の中にやわらかく眺められる。昼ではないが夜という感じでもない。事物の形はそのままだが、影というものが存在しないのだ。この巨大なネヴァ河のほとりの遊歩道には、短い夏の名残りを惜しむ恋人同士の姿が幾組か彫像のように立ちつくしていた。

「白夜(びやくや)、というのですね」

と、染乃が振り返って言った。彼女は黒い長いドレスに灰色のショールをはおり、髪を頭のうしろに丸くまとめて、ほとんど化粧のない顔をじっとネヴァ河の水面に向けている。

「夜ともつかず、昼ともつかず、不思議な眺めだ。北欧のラップランド地方では真夜中に太陽が見られると聞いた」

男の声が低くこたえた。染乃はその声を発した背後の人影のほうに小さくうなずいてみせると、手をのばして水面を指さした。

「ほら、あそこに水鳥が――」

染乃のうしろに立っている洋服姿の男は、雁木機一郎である。彼は工場で働く労働者のような青い木綿のズボンと、粗末な上衣を着て、鳥打帽をまぶかにかぶって立っていた。その帽子の下からはみ出している長髪には、ほとんど灰色に近いほど白髪が混じっている。

白夜の淡い光が機一郎の横顔を、いっそう酷薄なものに見せていた。青白く削げた頬、しゃくれた顎、眉根にきざまれた深いしわと落ちくぼんだ眼が、かつての若々しい機一郎の面影をまるで一変させていた。彼の言葉は低くかすれ声で唇からもれ、彼の姿勢は今にも風に吹かれて河面に落ちこみそうに見えた。

「憶えていらっしゃるでしょうか」

と、染乃が背中を向けたまま呟いた。

「なにを？」

「むかしむかし、浅の川の上の卯辰山の天満宮でお喋りしたこと」

「そんなこともあったな」
「あの時、機一郎さんは日本海の向うに大きな見知らぬ土地があると言われました」
「ほう」
「自分はその海の向うの大地を見ているのだと――」
「忘れた」
「もっとほかのことも言われました」
染乃は顔をあげて機一郎の暗くかげった表情をのぞきこむように、
「男には見えて、女には見えんものがあるのだ、と――」
「そんな事を言ったかな」
「ええ。おっしゃいました」
「金沢か」
機一郎は大きなため息をつくと、自分に言いきかせるように低い声で言った。
「このペテログラードから金沢までどれ位はなれているだろう。今はもう思い出すこともなくなってしまった土地だがね」
「忘れてしまわれたのですか」
「忘れた、というより、もうおれには日本という土地は存在しないのだ。その土地に雁木機一郎という人間が存在しないのと同じようにな」
染乃はそっと機一郎の腕に自分の片手をからませた。そんなふうに断念している機一郎の絶望

の深さの淵まで降りて行くことのできない自分が、じれったく、辛かった。機一郎はイワーノフと染乃と三人でこのペテログラードへやってきて一カ月たつ今も、まったくあのナホトカの街でそうだったように死んだ人間のような表情を変えていないのだ。革命前はペテルスブルグとドイツ風に呼ばれていたこの都も、今はペテログラードと改められて、まだ熱っぽい革命の余熱が街に渦巻いていた。だが、その中で機一郎はすべてに無感動な表情を崩さず、そのことでイワーノフを時にはひどく苛立たせたりもするのである。

「寒くはありませんか」

「いや」

「そろそろ帰りましょう。あの人ももう帰ってくると思います」

「イワーノフは今夜も帰らんだろうな」

機一郎は染乃に腕を支えられたまま、ゆっくりと歩き出して言った。

「彼はいま政治に熱中している。彼は夢を見ているのだ。革命が人間の苦しみを永遠に追放したかのような錯覚におちいって、もうまるで幼児のように夢中になっているんだよ。おそらく今夜も労働者たちとの委員会とやらで徹夜だろう。その夢が覚めねばいいが」

「あの人は心の優しい人なんです」

染乃はたしなめるように言った。機一郎はかすかに笑って、

「だから傷つきやすいのだ。詩人か文学者には向いているが、政治には向かん男だ。いつかまた辛い目に会う日がくるだろう」

「帰りましょう」

染乃は大理石の見事な河ぞいの遊歩道を、ゆっくりと機一郎と並んで歩いて行った。どこからか遠い鐘の音がきこえてくる。彼女は二人の男と共にシベリアの港町を出港し、この古いロシアの都にたどりつくまでのおよそ半年の日々を思いおこして大きなため息をついた。

今にして考えてみると、それは長い、はるかな旅だった。ナホトカから北欧ノルウェイまでの船旅は、ただ退屈に耐えるだけの苦しさだった。だが、ノルウェイからフィンランドへはいり、さらに国境を越えてロシアへ向う地上の旅は、疲労と不安の連続だったと言っていい。

染乃はイワーノフと機一郎という二人の男性と共に、北国に育った女だけが持つひそかな強さでその苦しい旅に耐えた。ペテログラードへ着くまでは、それでもはっきりした目的のある旅だったから、三人の間に冷たい空気が流れることはなかった。イワーノフは、すっかり人が変ったように無口で虚無的になった機一郎を、おだやかな思いやりで包もうと努力しているようだった。だが、このペテログラードへ着いてみると、最初のイワーノフの目算は、ことごとく消えうせてしまったのだ。

まずイワーノフの両親や妹たちの邸宅は新しい革命政府に接収され、家族たちの行方も知れなかった。イワーノフは染乃と機一郎という二人の異国人を抱えて、その晩の住家から探さなければならなかったのである。

さし当りの宿は、街の裏通りの崩れかけた建物の三階にみつけることができた。東園(トンユン)の張文国

からもらってきた金の最後は、その家賃を払うために消えてしまった。イワーノフは、知人をたずねて街を駆け回ったが、彼の親しかった友人たちはモスクワへ行ったり、白軍と共にシベリアへ逃れたりして、ほとんどペテログラードにはいなかった。

そこで彼は当座の生活を支えるために、郊外の機械工場へ技師として働きに出ることにしたのである。動乱と革命の嵐の中で、異国から舞いもどってきたイワーノフにはそれしか道がなかったのだ。彼は激しい労働に耐えられる体ではなかった。だが、彼の機械に関する知識が役立って、技師として職場を見出すことができたのである。

イワーノフはただ働くだけでは満足できないらしかった。彼の胸の奥には、この新たな民衆の国の誕生と旅立ちに対する押えきれぬ感動と興奮が渦まいているのだった。彼がかつて夢みた人民の社会が、いまここに彼を迎え入れているのである。彼はその工場内での政治的な集会に積極的に参加し、労働者たちの委員会に関係して毎晩おそくまで議論したり、ビラやポスターを作ったりしはじめた。時には工場で徹夜して、帰ってこない晩もあった。

機一郎と染乃は、ひとつの部屋でイワーノフの帰りを待った。イワーノフが帰ってこない晩など、時間をもてあましている機一郎の気分転換のために、ペテログラードの街を散歩することがあった。その古く美しい街を歩き回ることは、楽しいことではあったが、空腹と精神的な疲労がその楽しさを色褪せたものにしていた。そして石のように表情を変えない機一郎の態度が、染乃をいっそう孤独にした。彼女はこの古い街の白夜の底で、自分をこれまでになく孤立したものに感じることがあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

機一郎と染乃は、冷たい石の階段を三階の部屋へのぼって行った。その途中で、機一郎は三度も立ち止り、呼吸を静める様子だった。

「大丈夫ですか」

染乃がきくと、機一郎は息をはずませながら、心配しないでいい、と呟いた。

三階の彼らの部屋は、窓がひとつしかなく、暗くてがらんとしていた。壁際に木の寝台がそなえつけになっており、そこには染乃とイワーノフが寝た。機一郎は長椅子の上に毛布をまとって眠るのだった。染乃にはそんな機一郎がひどく哀れで、何とかしたいとは思うのだが、今の彼らとしては、それより外に方法がなかったのである。

「疲れたでしょう、機一郎さん」

染乃は長椅子の上で肩で息をついている機一郎に茶を沸かしてさし出しながら言った。

「イワーノフが帰ってくるまで、椅子の上でなくって寝台でおやすみなさい。あたしはその長椅子にやすみますから」

「そんなことを心配しなくてもいい」

「でも——」

「おれの体はどうせもう駄目なんだよ」

「……」

機一郎の顔色は悪く、動作も緩慢で、食欲もなかった。時としてひどく顔が紅潮し、高い熱を

出すこともある。それにもかかわらず、機一郎は安いウォトカを飲み、目をすえたまま暗い日当りの悪い部屋にとじこもって一日中じっとしていた。
「さあ、ここへ」
染乃は長椅子の上の機一郎を抱きかかえるようにして寝台の上へ連れてきた。
「イワーノフが帰ってきてもかまいません。ぐっすりおやすみなさい」
「染乃——」
「はい」
「ここにきて、一緒にいてくれないか」
「え?」
「おれのそばに坐っていてくれ、何となく心細いのだ」
機一郎の声は染乃の心にしみ通るような淋しさがあった。染乃は思わず機一郎の胸に顔を押しつけ、両手で彼の痩せおとろえた肩を抱いた。
「機一郎さん」
「暖かいなあ、お前の体は——」
「どうして機一郎さんはそんなに自分をいじめるのですか」
「自分というものが、もう死んでしまっているからだよ」
「死んでなんかいません。ほら、この通りちゃんと——」
染乃は機一郎の胸に手をさし入れて、思わずその手を引っこめた。彼女の指に触れた機一郎の

胸は、まるで洗濯板のように骨があらわになって、彼が染乃の思っている以上に弱っていることを示していたからである。
「元気を出してください、機一郎さん」
「染乃、おれの頼みをきいてくれるか」
「はい。なんでも」
染乃はじっと機一郎の目をみつめた。機一郎はそんな染乃の視線をまぶしそうに受けて、
「いや、やはりよそう」
「言ってください」
「おれは今、ちょっとどうかしていたのさ。もう忘れてくれ」
「機一郎さん、あたし、イワーノフと同じように機一郎さんのことを大切に思っているんです。なんでもおっしゃってください」
「ありがとう」
機一郎のくぼんだ目もとに、白い光ったものがあふれた。彼はそれをぬぐいもせず、小さくうなずくと、
「それは判ってるよ。お前はおれのことを本当に心配してくれてるんだ。それが判ってるから、なおのこと言っちゃいけないことなのさ」
「いやです」
染乃は機一郎の肩をゆさぶって叫ぶように言った。

「おっしゃってください。でないと、あたし眠れません」
「……」
機一郎はしばらく黙っていた。それから、ふっとため息を吐くと、独り言のように呟いた。
「染乃、服をぬいで裸でおれを抱いてくれ」
染乃はその機一郎の言葉を、意外とは聞かなかった。はじめから彼が何を望んでいるのか、自分には判っていたような気がした。
「変な気持ではない。ただ、そうして欲しかったのだ。心細くて、そうでもしてもらわなくては眠れそうになかったのだ」
機一郎は弱々しい声で言った。染乃はじっとそんな機一郎の顔をみつめていたが、不意に唇を噛み声を忍んで泣きはじめた。そして涙をこぼしながら、ゆっくりと黒い服をぬぎはじめた。服を脱ぎ、下着を脱ぎ、すっかり何もかも脱ぎすててしまうと、染乃はその豊かな白く輝く肉体を静かに機一郎のそばに寄せてよこたわった。
「機一郎さんも——」
と、染乃は言った。そして、彼の服を、母親のような手付きで脱がせはじめた。機一郎は目を閉じたまま、染乃のなすがままにされていた。そして二人がすっかり生れたままの姿になると、染乃は両腕で優しく機一郎の信じられないほど痩せほそった骨ばった体を抱きしめた。
染乃はその時、イワーノフに悪いとか、恥ずかしいとかいう気持は少しも感じなかった。むしろイワーノフの分も一緒に、機一郎のそんなすさみ切った心を暖めてやりたいと願う気持で一杯

だったのである。
機一郎は染乃のふくよかな乳房に顔を埋めてじっとしていた。彼の男性は、染乃の豊かな太腿の間に触れたまま、じっと小さくしぼんだままだった。そのことがまた一層、染乃の心に哀しみをかきたてるのだった。
「機一郎さん、あたしはもっと前にこんなふうにしてあげるべきだったのでしょうか」
「いや」
機一郎は首を振ると、
「一生にただ一度、ただ一度だけのことだ。それでいい。もし死んでも心残りはないような気がする」
「いやです。そんな心細いことを言ってはいけません」
「足音がきこえる」
と、機一郎が言った。染乃は首をあげて耳をすませた。
「何もきこえないわ」
「いや、いま下の道路から階段をあがりかけている。イワーノフの足音だ。さあ、早く服を着なさい」
「いいえ」
「どうする気だ」
「このままの姿をイワーノフに見てもらうのです」

「馬鹿な。彼は誤解するぞ」
「そんな人ではありません。私の気持はきっとわかってくれると思います」
「そうかな」
染乃は機一郎の体を胸の中に抱きしめたまま動かなかった。こんな場面を、もしイワーノフに見られたらどうなるか、ということを彼女は考えていなかった。自分がやましい気持でそうしているのではなく、一人の人間として痛み疲れた機一郎に生命のぬくもりを伝えようとしているのだということを、彼はきっと理解してくれるはずだと信じていた。
「やってきた。やはりイワーノフだ」
機一郎が言った。染乃はじっとしたまま耳をすませた。
足音がドアの向うで止った。そしてかすかにドアがきしんで、イワーノフがはいってきた。たったひとつの窓から流れ込む白夜の光の中に、染乃の白い体がほのかに浮びあがっている。
「疲れたでしょう。あなた」
と、染乃はロシア語で言った。
「あたしはここに、機一郎さんと一緒にいます。こちらへきてください」
「どうしたんだ、ソメノ」
と、イワーノフが驚いたように言い、ぽかんと口を開けて寝台の上に重なりあっている二人を眺めた。
「裸になった機一郎さんのそばにいるんです。この人を見てください」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com